

大阪健康福祉短期大教授(福祉経済)

かわぐち けいこ
川口 啓子

私の視点

dai-siten@asahi.com



◆介護の仕事 今こそ安定した雇用創出を

りも政府が低賃金・過重労働に
つながらる低い介護報酬を定めた
ためだ。正職員の介護福祉士や
ヘルパーらでさえ約4割が所定
内賃金20万円未満という調査結
果もある。その揚げ句、一時的
な雇用調整を担わされたのでは
たまらない。政府にはむしろ、
この機に介護の領域での安定し
た雇用創出施策を求めたい。

少くない。社会の支え合いの
機能が目に見えて低下し、国民
は安心して暮らせる日本を描け
ないでいる。

え、その人生に寄り添う。施設
や住宅の限られた空間の中から
人と人との結びつきを育て、地
域社会に発信する。そう考える
と、介護は人間社会の本来の在
り方を呼び戻す仕事であるとい
っても過言ではない。

相次ぐリストラや内定取り消
しで、介護に職を求める人たち
が現れ始めた。私が勤める短大
の実習施設は他府県にまで求人
を出していたが、いまは大阪府
内だけで十分だ。人手不足だっ
た現場は助かるが、半面、「失
業よりはマシ」というネガティ
ブな選択肢にすぎないかと思っ
と、複雑な気持ちになる。だ
が、そうではあっても介護に職
を求める人たちが歓迎したい。

バブル経済の影響からか、お
金さえあれば生活できるという
現実が、お金のためだけに働く
という風潮を生むようになって
きた。夢と希望をお金に換算し、
国民の支え合いである社会保険
料すら引かれることを嫌う傾向
が広がりがつつある。仕事を通じ
て「社会の役に立とう」という
気持ちはいつしか出番を失い、
人とのかわりを避けるものも

だが、介護はこれとは正反対
だ。介護は、そもそも人々が集
う社会に組み込まれていた支え
合いの機能である。長い歴史的
時間を経て、基本的人権の確立
とともに健康保険や年金などが
制度化された延長上に介護保険
も存在する。高齢社会に突入
し、家庭内に潜在化していた介
護の機能が社会的に担われる時
代を迎えた今、介護は国民の支
え合いの仕事としてますます多
くの人材を必要としている。

あらためて、介護に職を求め
る人たちに伝えたい。誠実に介
護と向き合い、働きながらも
介護にかかわる資格を取り、介
護を一生の仕事にしてほしい。
そして、こうした人々を確かな
雇用で支える政策こそ、社会的
な支え合いの機能と人と人との
結びつきを強くむくことになる
だろう。日本は今こそ、年をと
っても障害を持っても安心して
暮らせる社会へと大きく舵を切
るべき時である。

これまで介護施設が正規雇用の
求人を出しても、なかなか人が
が集まらなかった。原因は何よ

食事などの直接的介助だけでは
なく、介護が必要な人々の基本
的人権と心のきずなを第一に考

投稿は〒530・8211
朝日新聞社「私の視点」係
か、dai-siten@asahi.co
jpへ。本社電子メディアにも
収録します。